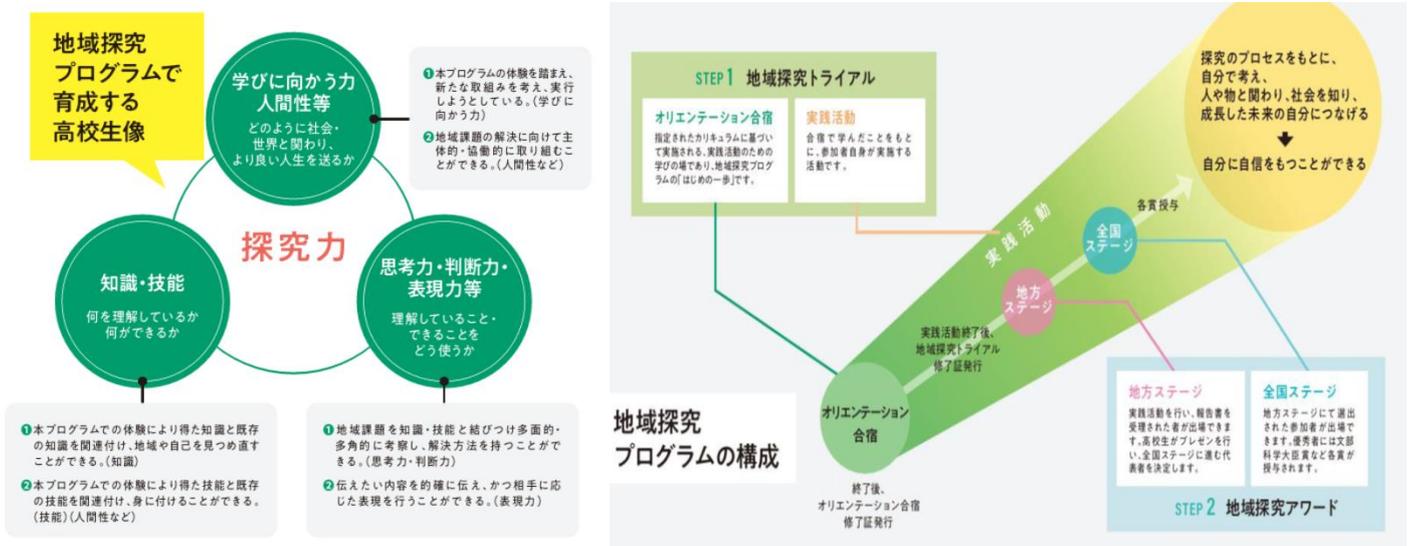


「全国高校生体験活動顕彰制度 地域探究プログラム」年間活動報告

令和3年4月16日（金）～令和4年2月13日（日）

【目的・趣旨／概要】

本事業は、高校生が体験活動を通じた成長を促し、改訂された学習指導要領のキーワードである「探究」の手法を用いて学びを深めることや、取組みを段階的に分け、効果的な学びの手法が修得できるよう構成されている。特に、地域での実践活動では、多様な人々と協働しながら地域・社会にある課題解決に向けた取組を行うことで、郷土や自然に愛着をもち、新たな価値を創造する高校生の育成を目的としている。全体を通して、探究の手法を用いながら、「個人の興味関心と地域の魅力・課題を結びつける力（探究力）」を実践的に身に着けることを目的としている。



【参加者】

・福島県立光南高校 文理進学系列 25名

【協力者】

〈業務運営全般〉

- ・一般社団法人未来の準備室 理事長 青砥 和希
- ・同上 理事 湯澤 魁

〈各プログラム講師〉

- ・西郷村観光協会 地域おこし協力隊 北浦 鑑久
- ・西郷フットパスの会 会長 三村 正
- ・同上 副会長 齋藤 賢

〈学生支援スタッフ〉

- ・福島大学 4年 鈴木 陸
- ・明治大学 4年 勝田 陸
- ・創価大学 3年 千葉 博仁
- ・福島大学 3年 奥山 雄冴
- ・福島大学 2年 小根山 舜大
- ・修明高等学校 3年 白木 里奈



【プログラム概要】

【ガイダンス】令和3年4月16日（金）

那須甲子職員と未来の準備室の青砥氏で光南高校に出向き、「地域探究プログラム」の趣旨や地域課題への取り組み方を説明した。また、自己理解として「20 Question Sheet」、次時までの課題として「自身の地域について考えよう」の2種類のワークシートに取り組んだ。



【講話】令和3年4月23日（金）、5月7日（金）

4月23日（金）は、担任の先生と未来の準備室の青砥氏を中心として「自身の地域について考えよう」のワークシートを活用しながら、自分を知る・地域を知るきっかけづくりの場とした。

5月7日（金）は、西郷村観光協会の北浦氏、未来の準備室の青砥氏の両名を講師に、「地域づくりの実践」の内容で講話を実施した。

北浦氏には、地域おこし協力隊として力を注いでいるフットパスについて「ぶらぶら歩くお散歩ウォークが地域課題を解決するカギになる」をテーマに講話し、生徒たちに地域の見方を伝えた。

※フットパスとは、foot（歩く）、path（道）の意味で、イギリス発祥のウォークスタイル。自然や風景、季節を感じ、街並みをのんびり歩くことを楽しむ。

青砥氏には、zoomを活用したオンラインで「高校生びいきのカフェができるまで」をテーマに講話し、生徒自身の進学も含めたキャリアの視点(will)、課題研究と称し設定したテーマの視点(can)、さらに、地域ニーズの視点(needs)と3つの視点の解説を交えて、生徒たちに探究学習の進め方を伝えた。

最後に、次時までの課題として「自分が活動したい地域・他県や他国の地域活動の取り組み」について説明を受けた。



【フィールドワーク①、講義・演習①】令和3年5月22日（土）

西郷村観光協会の北浦氏、西郷フットパスの会の三村氏、齋藤氏を講師として「フットパス」を通じたフィールドワークを実施した。雨天の中での活動ではあったが、未来の準備室の青砥氏、学生支援スタッフ2名、那須甲子職員が支援する形で2チームに分かれ、新白河駅高原口まちおこしセンターを発着所に西郷村の魅力と課題を歩きながら見つけていった。

【川辺と町場を歩く・堀川せせらぎルート／約5.5 km】



【原方街道と2つの村を歩く・歴史街道ルート／約6.5 km】

フットパス終了後は、魅力や課題を共有し、そこから見える未来の姿や今の自分にできることについて考えを深めた。

【講義・演習②】令和3年6月4日（金）、18日（金）

6月4日（金）は、那須甲子職員がファシリテーターとなって「課題解決の基礎」についてKP法を用いて探究のプロセスの再確認をしたり、ワークシートを用いて仮設の立て方を学んだりした。

6月18日（金）は、未来の準備室の青砥氏と学生支援スタッフによる「地域課題の探究」についてグループ活動を行った。各自の仮説について他のメンバーから意見や質問を受け、自身の仮説をブラッシュアップする姿が見られた。



【フィールドワーク②、講義・演習③、発表①】令和3年6月20日（日）

未来の準備室の青砥氏が運営するコミュニティ・カフェ EMANON を拠点とし、白河市内でのフィールドワークを5グループで実施した。

【第1部】生徒たちは那須甲子職員や学生支援スタッフと意見交流しながら、市内の商業施設や関係各所を訪問することで、自分たちにできる実践活動のイメージを模索した。

【第2部】全体で「フィールドワーク報告会」を行い、多面的・多角的に考察することで、具体的な実践活動の方向性を見出していた。



【講義・演習④】令和3年6月29日（火）

未来の準備室の青砥氏と那須甲子職員による「行動計画の基礎」をテーマとした行動計画作成の支援を行った。実践活動を行う上で重要な仮説の設定が適切であるか、will（興味・関心）・need（必要性・課題）・can（今の自分にできること）の重なる部分に探究テーマが設定されているかを再確認・修正していく時間となった。



【発表②、ガイダンス】令和3年7月9日（金）

那須甲子職員による「実践活動のためのガイダンス」を行い、自身の実践活動を行う上での注意点や報告書作成、地域探究アワードの予定等を確認した。

【地方ステージ[東北ブロック]】令和3年12月26日（日）

各自が行った地域での実践活動について発表するプレゼンテーション活動、評価委員による質疑応答や講評、他者の発表視聴を通して、探究の学びのサイクルを促進する機会とする地域探究アワード地方ステージ[東北ブロック]が国立那須甲子青少年自然の家をメイン会場としたオンラインで開催された。

参加高校生は実践活動の報告書が一定の評価を受けた全40名。内訳は、個人部門7名グループ部門8組で、それぞれが7分間のプレゼンテーションと8分間の質疑応答を行った。

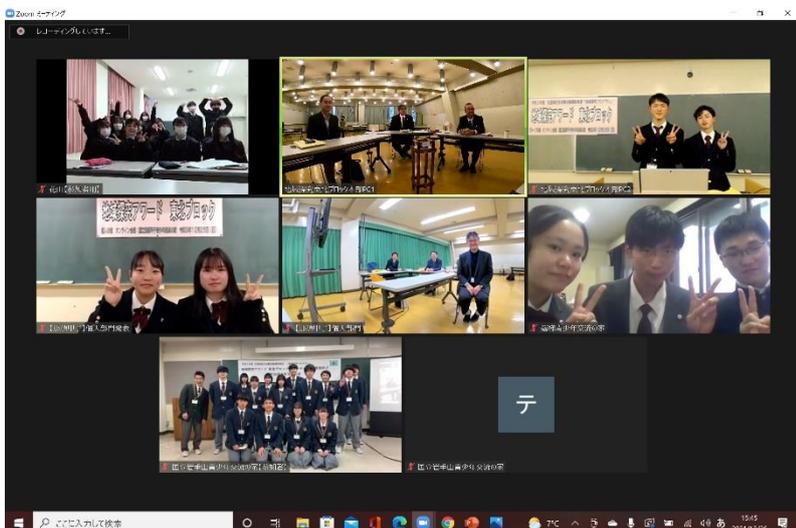
【個人部門・那須甲子エントリー2名】

臼井ちなつ「平田村元気計画 ～地域福祉について学び、行動しよう！～」

鈴木彩夏「光南ハンド部から世界へ 動画で繋ぐストレッチの輪 ～笑顔と元気を生み出すストレッチ動画の輪を広げよう！～」

【団体部門・那須甲子エントリー1組】

滝川翔太・生方瑠弥「“数学苦手な人”この指と～まれ！
～数学の魅力×地域の魅力～」



最終的に、個人部門で優秀賞を受賞した鈴木彩夏さんが全国ステージ出場を決めた。

【全国ステージ】令和4年2月13日（日）

地方ステージ同様に、全国ステージもオンラインで開催された。個人部門5名、団体部門7組の参加高校生たちは各地方ステージ終了後も地域での実践活動を積み重ねており、プレゼンテーションの内容もさることながら、質疑応答の受け答えに至るまで素晴らしいものであり、参加高校生たちが互いに高め合う場となっていた。



鈴木彩夏さんが、個人部門で3位の成績となる「全国高校生体験活動顕彰制度委員会委員長賞」を受賞した。

【企画・運営上の工夫】

- ・コミュニケーションツールアプリ「Slack」を活用し、関係各所との情報共有の円滑化を図った。
- ・オリエンテーション合宿に向けてコロナ禍で宿泊での実施が難しくなったため、日帰りのフィールドワークデーを2回設定し、カリキュラムを複合的に進めた。
- ・毎回課題を与えることで、継続的な学びの環境を維持した。
- ・多種多様な地域人材に加えて学生支援スタッフを活用し、様々な世代や立場からのサポート体制を整えた。

【成果】

- ・多くの地域活動実践者に関わることで、キャリアの視点や社会の在り方について理解を深めた。
- ・繰り返し自身の地域選定・課題設定・仮説検証を行うことで、探究の学びのサイクルを推進した。
- ・報告書の作成やプレゼン発表、質疑応答を通して、コミュニケーション能力の向上が図れた。
- ・地方ステージ[東北ブロック]運営を担当したことで、職員の多くが地域探究プログラムへの理解・興味関心へと繋がった。

《参加者の声》

「『地域とは何か』、『今の自分にできることは』、など改めて考えるきっかけとなった。」

「地域を実際に歩いたり、人と触れ合ったりすることで、地域の魅力や課題が分かった。」

「自分と同じ高校生が、すばらしいプレゼンテーション発表をしていてとても刺激になった。」

「普段の何気なく通り過ぎていた街並みが違って見えた。自分のものの見方が変わった。」

【課題と方策】

- ・カリキュラムの充実を図るためには、週1時間の総合の授業では厳しい。今年度は毎時課題を与えることで補完した。
- ・報告書形式と審査の評価基準については、公平性を期すために改善の必要がある。
- ・探究活動を経験した先輩方が参加するような、学年を超えた学びの場があるとより効果的である。

国立那須甲子青少年自然の家 [作成] 企画指導専門職：海野 裕太